

# 甲状腺外科草子 108

## 藤堂高虎の奮闘：大阪の陣

杉野圭三

藤堂高虎は大阪の陣に徳川家康配下として参戦した。慶長19年(1614)の冬の陣での損害は少なかったが、翌年の大坂夏の陣では八尾において豊臣方の長宗我部盛親隊と激闘を繰り広げた(八尾の戦い)。



大阪城 (2024年はオーバーツーリズムで大混雑！)

双方の前線部隊は出合い頭に衝突し、指揮系統は乱れ随所で大混乱となった。藤堂軍は長宗我部軍の猛攻により600人余りの死傷者を出し、藤堂良勝や藤堂高刑など一族を含め多数の股肱の臣を失った。



藤堂玄蕃良重へ贈った兜

この戦いの前に高虎は豊臣秀吉から拝領した自慢の唐冠形兜(とうかんなりかぶと)を一族の若者の藤堂玄蕃良重に贈っていたが、彼もこの戦いで討ち死にしている。

家臣の槍の勤兵衛と呼ばれた渡邊勤兵衛(1562-1640)は阿閉貞征、中村一氏、増田長盛に仕えた後、高虎に2万石で仕えた有名な武将だが、戦法について高虎と意見が衝突、苦戦する味方を援護せず、結果として多くの損害が出た。戦後、勤兵衛はこの独断専行を咎められ、藤堂家を出奔することとなった。

高虎は八尾常光寺で戦死した藤堂良勝らを

弔う法事を執り行い、次のように語った。

「良勝は幼少から我に従い、戦場に赴くたびに功名を立てないことはなく、天下によく知られた者である。生涯で大功を立てた働きは十三度。その余心ばせの武功は数知れず。毎度、加秩するが辞して受けず、真忠の士である。このたび、わが先鋒を蒙るを悦んで覚悟して忠死した。これほど残念なことはない」

戦後、高虎は伊賀国内と伊勢鈴鹿郡などで5万石を加増され計27万石になり、従四位下に昇任。高虎はこの戦いの戦没者供養のため、南禅寺三門を再建した。



南禅寺三門 高虎の書状(藤堂玄蕃の家族宛て)



南禅寺三門から眺める京の残照(2003)

南禅寺三門の上には本尊の宝冠釈迦座像。月蓋長者、善財童子、十六羅漢、本光国師、徳川家康、藤堂高虎の像と一門の重臣の位牌が安置されているらしい(詳細不詳)。高虎の大きな悲嘆と痛惜の念を感じる。内部は暗く、撮影禁止で説明もなく残念である。

この三門の上にゆっくりと座し、残照の京都市内を一望するのは至福のひと時である。

まさに絶景かな！ 絶景かな！

参考資料：下天を謀る(安部龍太郎)、Wikipedia、伊賀上野城のお宝(伊賀文化産業協会)

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2024年7月30日